

第Ⅴ章 考 察

1 節 12世紀末～13世紀の山茶碗の変遷

1. はじめに

瀬戸市小田妻古窯跡群で焼成されたものはほとんどが山茶碗と呼ばれる焼きものである。山茶碗は基本的に瓷器系陶器第2類に分類される碗・皿（・鉢）で構成される無釉の日常容器である。¹⁾ 今回の調査で出土した山茶碗の量は多く、底部破片数でA区では約13,500個体、B区では約7,500個体、合計約21,000個体が出土している。時期的にも複数の型式にわたっていて、おおよその年代としては12世紀末～13世紀が考えられる。この時期は瀬戸窯に於て山茶碗が急激に量産されるようになる時期にあたる。この地方の中世集落遺跡においても、出土する山茶碗の主な生産地が猿投窯・常滑窯から瀬戸窯へと変化する頃である。²⁾ 量産化ということが生産技術の上にどのように表れているか興味深いところである。

今回の調査区では遺構のあり方などから前後関係のはっきりした遺物群が幾つもあり、山茶碗の変遷を考えるうえで良好な資料が得られた。瀬戸においてはかなり前から山茶碗の編年が行われ、編年案も提示されている。³⁾ そのなかでも代表的な藤澤編年では、この時期は5型式～9型式に相当する。近年、小田妻古窯跡群が存在する中世瀬戸窯水野区では山茶碗窯の調査例が増えてきており、これらの調査成果をもとに12～13世紀の山茶碗について新しい知見をもたらしている。たとえば、藤澤編年の6型式、7型式の山茶碗の変遷についてのいくつかの新しい見解や5型式の山茶碗の系譜論など⁴⁾ である。この節ではこれらの成果を踏まえながら、小田妻古窯跡群で出土した山茶碗の変遷とその背景について検討を加えようというものである。⁵⁾

2. 基本となる資料について

まず、考察を進める上で基準となる遺物群についてみる。小田妻古窯跡群では複数の窯が連続、あるいは併行して操業していたと考えられ、複数型式にわたる山茶碗が存在し、複雑な様相を呈する。しかし、窯体の中には側壁内や床面下、床面直上や分焰柱内などに、ある程度、一括性の高い遺物群がいくつか存在している。個々の出土状況の詳細についてはすでにⅢ章で述べたとおりである。これらの遺物は窯体の構築順序や堆積順序などから前後関係を推定することができる。また、灰原では堆積状況が複雑であるが、おおよその順序は推定することができた。そこでそれらの前後関係が明瞭な遺物群を抽出し、連続させることで、この地点に於ける遺物の変遷を示すことも可能となってくる。以下、順番に基準となる遺物群について説明する。

① SY01出土遺物

a. 窯壁内

SY01には補修の際に側壁内に伏せた形で塗り込められた碗を中心とした遺物群がある。胎土はすべてⅡ群のものである。器種は碗B1が主体で、B2も少しある。碗B1は体部が丸みを持ち、内面を工具で丁寧に撫でており、整形も丁寧である。形態的には碗A2と連続性を持つものであると考え

られる。皿も比較的丁寧な調整を施した皿B 1が伴う。

b. 窯体埋土

窯体埋土には流れ込みと思われる碗E 2が見られる以外はほとんどすべて碗B 2、C 1の組合せである。皿は皿B 1が主体となり、皿B 2、皿B 3も見られる。

c. 前庭部土坑

SY01の前庭部土坑にはSK03、SK04、SK05がある。Ⅲ章でも述べたことであるが、それぞれ炭や焼台に混じって多数の山茶碗が出土している。そのなかでSK03では碗B 2が主体となるが、SK04では碗B 3、SK05では碗E 2とそれぞれ主体となる碗の形態が違う。

② SY02出土遺物

a. 前庭部整地層

SY02はSY01、SY03の後に構築されたことがわかっている。SY02はSY01前庭部及び灰層の一部の上に地山を掘削した際に出たと思われる黄色砂質土を整地に使って前庭部を構築している。また、この時点でSY03の焼成部上半を破壊している。整地層はほぼ30～50cmの厚さで、あまり遺物を含まないが、若干の碗などが層中から出土している。碗ではⅡ群の胎土を持つ碗B 3・C 2が主体である。皿はほとんど出土しておらず不明である。

b. 分焰柱内

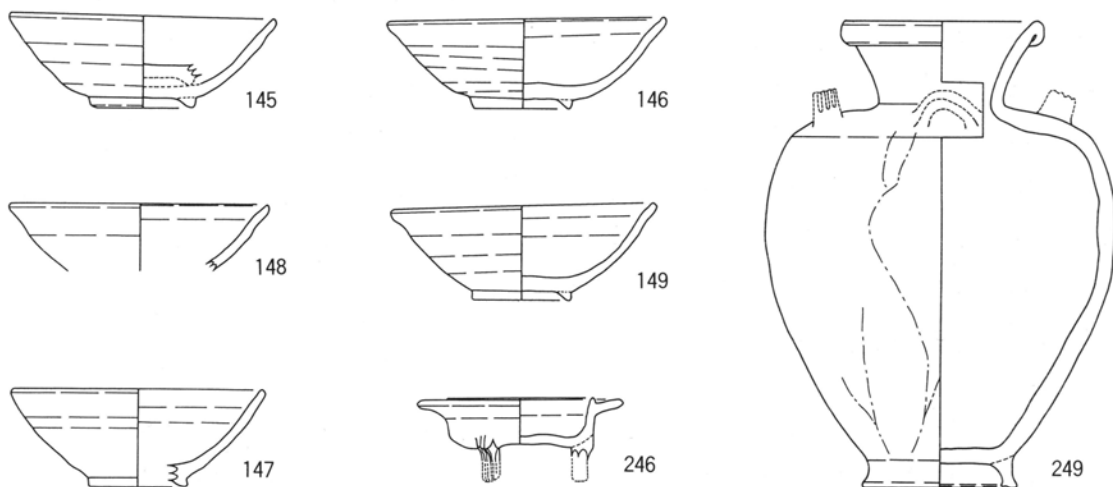
SY02分焰柱からは補修のために塗り込めたとと思われる碗・皿が出土した。量は多くないが、体部に丸みがある碗E 1が見られることに注目しておきたい。

c. 窯体埋土

すべて、Ⅲ群の胎土をもつ碗E、皿C類である。碗Eでは体部が直線的な碗E 2がほとんどである。Ⅲ群の胎土をもつ山茶碗が集中的に出土するのはSY02のみである。

③ SY03窯内埋土出土遺物

SY03は煙道部を欠損しているが、下半分は残存状況もよかった。床面上に幾つかの遺物が残存していた。碗は碗B 3・C 2が主体である。この窯の碗は口縁端部をやや外側に折り返している点が共



第57図 Aa区灰層最下層 出土遺物

通した特徴となっている。皿では皿B 3が主体となる。

④ SY04床面直上出土遺物

SY04 床面直上の遺物はⅡ群の胎土を持つもので、高台を持つ碗B 2と高台のない碗D 1が同時に出土している。口縁部の形態などは高台の有無に拘らず同じであった。皿では皿B 2、B 3が主体となる。

⑤ Aa区灰層 最下層（黒色灰層）出土遺物

灰層の堆積が薄く、掘削の段階で上層の遺物と若干混じってしまっているが、基本的にはⅠ群の胎土を持つ碗A 1を主体とする山茶碗で構成される層である。灰層は断続的で大部分が削平されており、遺物の量も極わずかで個体数は少なかった。しかし、これらの土器群は灰釉四耳壺・無釉陶器香炉などと共に出土し、小田妻古窯跡群では特異な器種構成を示している。碗A 1にはセットとなる皿A・鉢Aがある。皿Aの胎土はⅠ群の土器の中でも比較的砂粒が多く、やや灰色がかった碗A 2とよく似た胎土を持つものである。鉢Aは碗A 1と同じ白色のものである。

3. 編年案の提示

1) 資料の検討

それぞれの遺構の壁面や床面下の資料の形態的特徴などから遺物群の組合せ及び前後関係などを類推できる可能性がある。

①について

- ・ a と b の関係より碗B 1→碗B 2が推定される。
- ・ b の窯体埋土から碗B 2と碗C 1がある程度併行することが考えられる。

②について

- ・ a から碗B 3と碗C 2とが共伴する可能性が高い。
- ・ a と b, c から碗B 3・碗C 2→碗E 類が考えられる。
- ・ b と c から碗E 1→碗E 2が考えられる。

③について

- ・ SY03 を埋める形で②a SY02 の前庭部整地層が形成されていることから、碗B 2→碗B 3、皿B 3→皿C が考えられる。

④について

- ・ SY04 床面直上の遺物から碗B 2と碗D 1がほぼ同時期に存在したことが想定される。



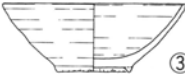


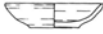

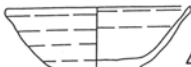
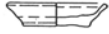
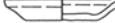








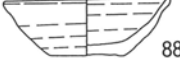


⑤について

- ・ 灰層の堆積状況から、碗A 1（灰層最下層）→碗A 2・B 1・B 2（V層）といった順序が想定される。ただ碗A 1は量的に少ないこと、皿がほとんど見られないことに注目しておかなければならない。

2) 小期の設定

以上、看取された事柄をまとめてみると次のような段階設定ができる。

1 期 碗・皿がⅠ群の胎土を持つ碗A 類・皿A を主体として構成される時期である。焼成した窯

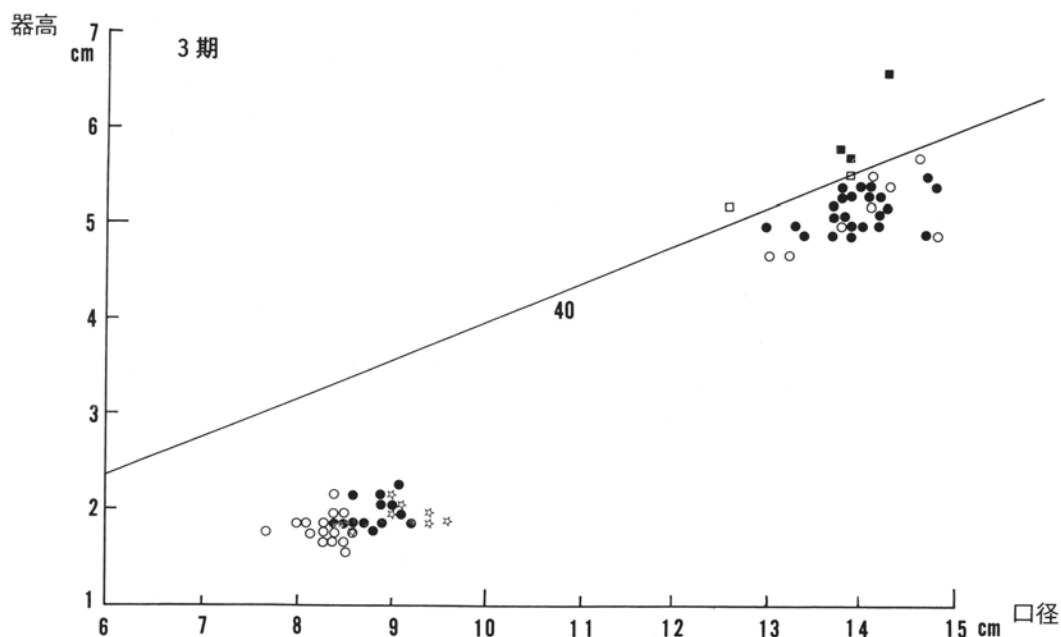
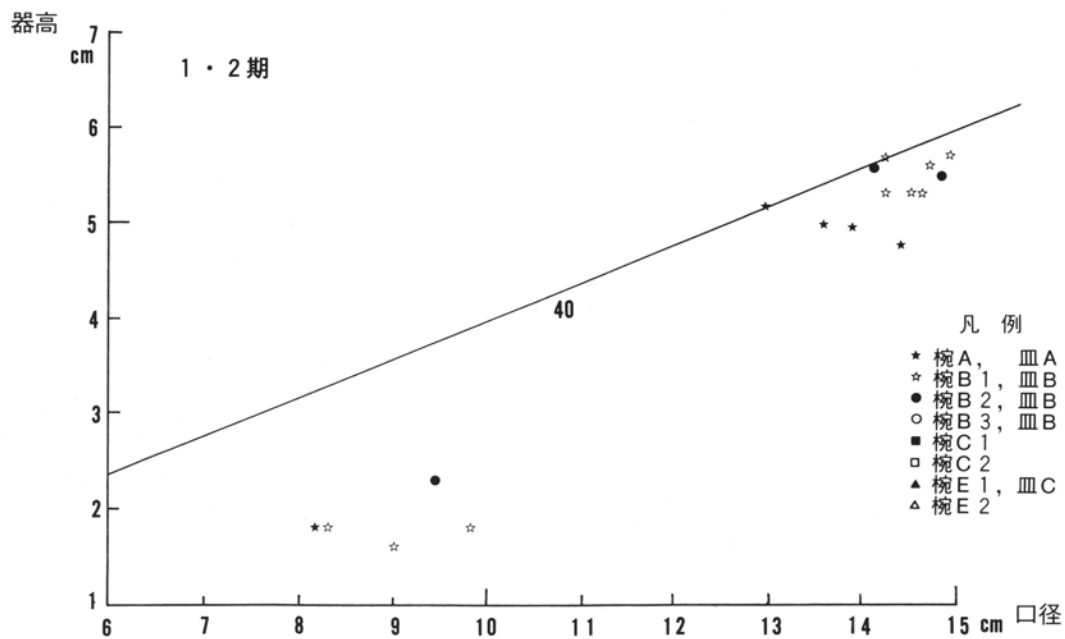
	椀	小椀・皿
	 ①	 ②
1 期	 ③  146  147	 ④
2 期	 150  4	 161  7
3 期	 21  22  266	 165
4 期	 80  81  64	 292
5 期	 88  91	 99 <p>①～④は小田妻6号窯（註7 文献より）</p>

第58図 出土遺物の変遷（1：6）

を直接特定できないが、Aa 区の内 of どれかの窯で焼成された可能性が高い。主体となるのは椀 A 1 である。ただ、量的にはごく少ないものである。それ以外にこの時期に灰釉四耳壺、無釉陶器香炉なども併焼されている。

2 期 椀・皿がⅡ群の胎土を持つ椀 B 1・皿 B 1 を主体とする時期である。しかし、Ⅰ群の胎土とⅡ群の胎土の中間の形態の椀 A 2 が見られる。この時期も遺物の量はあまり多くない。

3 期 椀・皿がⅡ群の胎土を持つ椀 B 2・皿 B 2 を主体とする時期である。これにわずかであるが椀 C 1・D 1 が加わる。この時期の遺物はかなり多く、生産が最も進展した時期と考えられる。



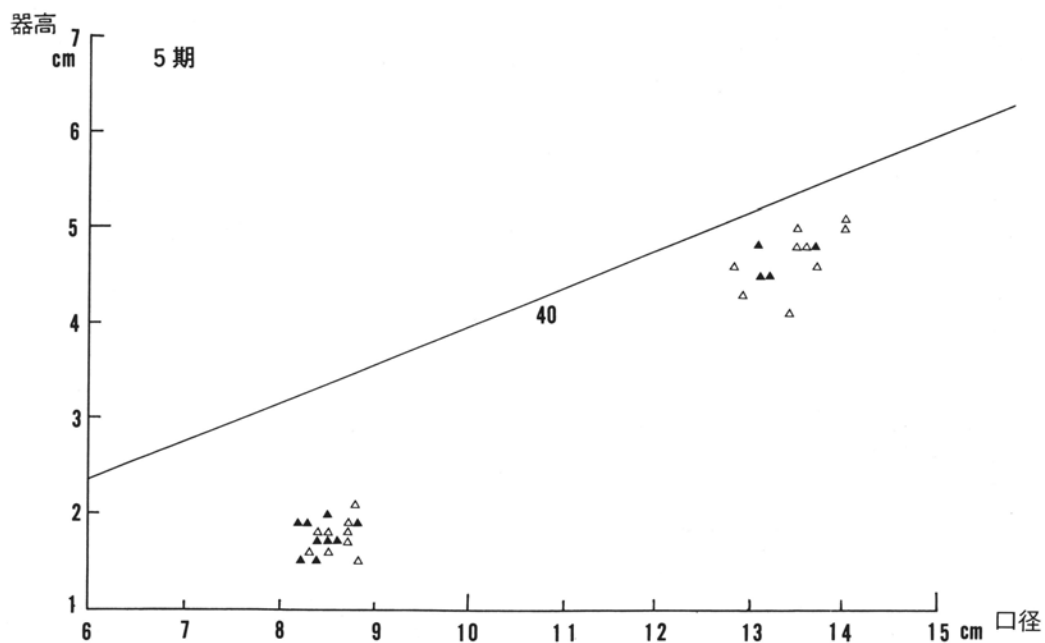
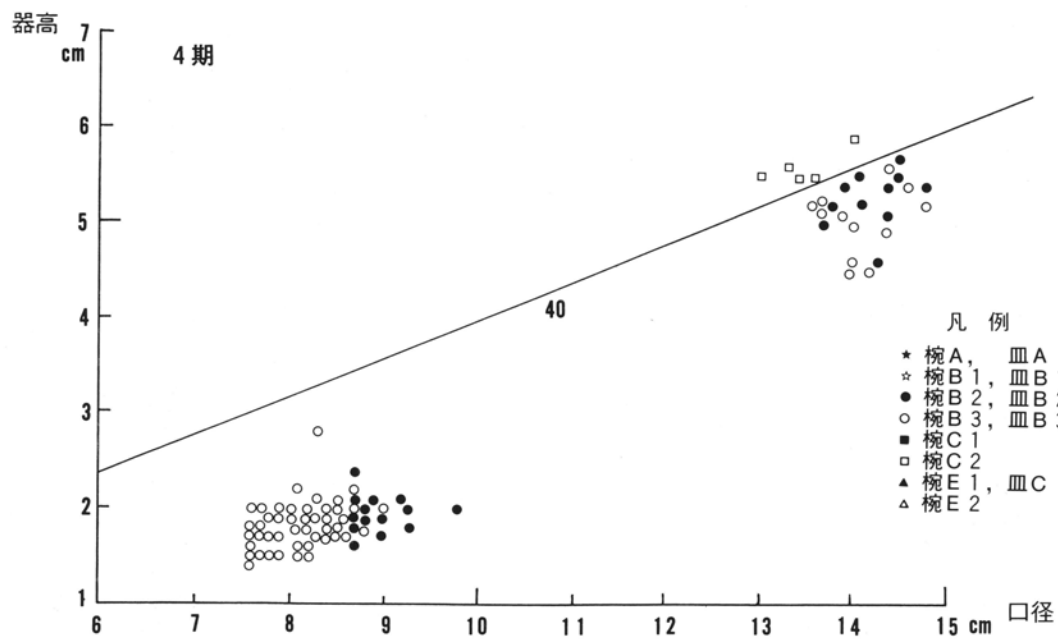
第59図 1・2期, 3期の山茶碗の法量

4期 碗・皿がⅡ群の胎土を持つ碗B3・皿B3を主体とする時期である。これに碗C2・D2が加わる。

5期 碗・皿がすべてⅢ群の胎土を持つ碗E類・皿Cで構成される時期である。

3) 実年代の推定

実年代を直接推定できる資料は出土していない。そこで、瀬戸窯で示されている編年と対応させて検討してみると、1期は5型式、2・3期は6型式、4期は7型式、5期は8・9型式に相当するものと



第60図 4期, 5期の山茶碗の法量

思われる。実年代を当てはめると1期は12世紀～13世紀初頭、2・3期が13世紀前葉、4期が13世紀中葉、5期が13世紀後葉～14世紀前葉となる。

4. 法量の検討

1) 口径及び器高について

該期の山茶碗の法量についてみると、第59図・第60図のようになる。

1期は主体となる椀A 1の器高が約5cmほどであるが、口径にややばらつきがある。平均すると約13.7cm位である。

2期になると椀B 1は口径約14.1cm、器高は約5.5cmで、器高が比較的高いことが特徴的である。皿B 1はばらつきが大きい、口径約9.1cm、器高約1.9cmである。皿は各時期を通じて器高がほぼ一定である。

3期では主体となる椀B 2が口径約14.0cmとあまり変わらないが、器高が約5.2cmと若干低くなる。皿B 2は口径が約8.5cmと小さくなる。器高は約1.8cmで変化はない。

4期の主体となる椀B 3は口径約13.9cm、器高約5.1cmとあまり変化はない。皿B 3は口径約8.1

器種	椀A 2	椀B 2	椀B 3	椀C 1	椀C 2	椀D 2	椀E 1	椀E 2	個数
250						1	1	2	4
260					1				1
270									0
280		1	1				1		3
290		2	1						3
300		2	1		1			1	5
310	1	2	3		1				7
320		4			1			1	6
330		2		1				1	4
340			2		2			1	5
350		2	2						4
360		1	1		1				3
370									0
380		1	1		1				3
390		2							2
400			1						1
410			1		1				2
420			1						1
430				1					1
合計	1	19	14	2	9	1	2	6	55
平均	310	328	261	380	290	250	265	298	298

第24表 椀の容量（単位cc：10未満切捨）

器種	椀A 2	椀B 2	椀B 3	椀C 1	椀C 2	椀D 2	椀E 1	椀E 2	個数
160								3	3
170							1		1
180								2	2
190					1		1	1	3
200									0
210		1	1		1	1			4
220		2	2		1				5
230		2	2		2				6
240	1	5	6						12
250					3				3
260		5	1	1					7
270		2	1		1				4
280		1	1	1					3
290									0
300			1						1
310		1							1
合計	1	19	15	2	9	1	2	6	55
平均	240	249	244	270	233	210	180	172	234

第25表 椀の重量（単位g：10未満切捨）

cm、器高約1.8cmと口径がやや小さくなる。

5期になると主体となる椀E 2の口径が約13.5cmと縮小化する。器高も約4.7cmと低くなる。皿では口径約8.5cm、器高約1.7cmとなる。

全体的な傾向を見てみると椀では1期から4期では口径が約14cmで、ほとんど変化しないが、5期のものは約13.5cmと若干縮小化する。器高は1期のものが約5cmである。2期になると約5.5cmで前期間を通じて最も高い時期となる。その後、徐々に器高を減じていく。

5期には器高が約4.7cmとなる。1期の椀類を除くと徐々に小型化していく。このような動きは服部の指摘するように、瀬戸市の南部地域の編年と若干の相違がある⁶⁾。

皿では器高はほとんど変わらないが、口径が時期ごとに縮小していく。ただ、5期だけは再び口径が少し大きくなる。

椀・皿ともに全体的に縮小していくようである。

2) 容量について

容量は完形のもののみにについて

計測した。その結果は第24、26表のとおりである。

碗については最も少ないもので 250cc、最大のものは 430cc、平均容量は約 300ccであった。碗 C 1 は 1つの資料が 430ccであるので、かなり大きい数となったが、それ以外のものはおよそ 300ccで各時期であまり変化がないことに注目しておきたい。時期がちがっても必要とされた容器は基本的に変わりが無いものと考えられる。

皿は最も少ないもので20cc、多いもので60ccで、平均容量は40cc弱であった。皿は碗と違って時期ごとに容量が明らかに減少する。これは口径が徐々に減少して行くことと関連したものであろう。山茶碗生産の初期に碗とセットになるものは小碗であり、そのころから器高の減少、容量の減少は続いている。小碗と皿のちがいは大きかったと思われるが、この時期の器高はほとんど2cmをきっており、使用に対しては大きな変化はなかったものと思われる。

3) 重量について

重量もよく乾燥したもので完形のもののみにについて計測した。

碗は最も軽いもので約 160g、重いもので 310g、平均重量約 234gであった。碗 A 1 は完形のものがなかったので、計測はできなかった。碗 A 2 は 240gであった。碗 B 類と C 類はあまり変化がなく、250g 前後であった。しかし、5期の碗 E 類は 200g をきり、約 180g であった。5期の碗はそれ以前のものと比べて約70%の重量となる。使用する粘土が節約でき、しかも製品自体のばらつきも少なかった。しかし、容量はあまり減少していないので、器壁を薄く仕上げる技術を獲得したといえよう。

皿については最も軽いもので40g、重いもので 110g、平均66gであった。徐々に重量が減少している。5期が最も軽く、80gを超えるものはほとんどなかった。

5. 山茶碗の変遷の背景について

1) 山茶碗の変遷

小田妻古窯跡群に見られる山茶碗の変化を見ると、特徴的なのはⅠ群(図版44 SO-1)、Ⅱ群(図版44 SO-2・3)Ⅲ群(図版44 SO-6)という違った3種類の胎土があるという点である。この違いに焦点を当てて変遷の背景について見てみたい。

考察を進める上で、今回の調査地点のすぐ南東にあった小田妻6号窯についても考察の対象とする。小田妻6号窯は昭和44年に調査が行われ、2系統の山茶碗が焼成されていたことが分かっている。1つの系統は藤澤編年の南部系4型式の山茶碗で、もう1つの系統は北部系の5型式の山茶碗であるという。しかも北部系の均質な胎土を持つものは窯内からまとまって出土したとされ、最終焼成時に近い

器種	皿B1	皿B2	皿B3	皿C	個数
20			7	3	10
30		5	35	8	48
40	3	24	50	9	86
50	6	19	8		33
60	2	6	1		9
合計	11	54	101	20	186
平均	49	45	36	33	39

第26表 皿の容量

(単位cc:10未満切捨)

器種	皿B1	皿B2	皿B3	皿C	個数
40			8	2	10
50	2		25	7	34
60	2	11	31	8	52
70	3	14	23	2	42
80	2	16	13	1	32
90		12	2		14
100	1	1	1		3
110	1				1
合計	11	54	103	20	188
平均	73	76	62	57	66

第27表 皿の重量

(単位g:10未満切捨)

時期には北部系の山茶碗を焼成していたことが想像⁷⁾されている。

すなわち、小田妻古窯跡群では12世紀中葉に小田妻6号窯が南部系4型式の山茶碗の焼成を開始する。その後、12世紀後葉に同じ窯のなかで南部系から北部系の山茶碗焼成に転化することになる。

小田妻6号窯が閉窯する頃、本報告で述べた1期が始まる。Aa区SY01では均質なⅠ群の胎土をもつ山茶碗を焼成している。形態としては器高の低い、体部に丸みを持つものとやや深目で、比較的体部が直線的なものがみられる。後者は形態が比較的小田妻6号窯出土品に似ており、これらの窯が連続しているものと考えておきたい。また、この時期には施釉陶器四耳壺や無釉陶器香炉を併焼している。

13世紀前葉の2期になると、Ⅰ群の胎土をもつものからⅡ群のものに変化し、施釉陶器との併焼もあまり見られなくなる。ただ、碗A2が少し見られる。碗A2は体部が比較的直線的で、前段階の器高が高いものに近い形態である。形態及び胎土から碗Aは碗A1と碗B1をつなぐものとなろう。碗B類では、この時期のものは器高がやや高いのが特徴である。この後、しばらくⅡ群の胎土をもつ山茶碗を焼成するが、徐々に成形、調整が粗雑化し、体部が直線化するという変化を見せる。

13世紀後葉の5期になると、Ab区、B区の生産が終了し、SY02の1基が操業していたのみである。ただこのとき胎土が砂粒を多く含むものから、砂粒の少ないⅢ群の胎土をもつものへと変化していることに注目しておきたい。口径、器高ともに縮小し、重量も減少する。

2) 画期とその背景

以上、小田妻古窯跡群の山茶碗には形態及び胎土の上で3回の大きな画期が見られたことになる。これらの背景にはどのような現象が考えられるのであろうか。

まず、第一の画期は1期の始まりのころで、12世紀後葉に南部系の山茶碗から北部系のものに変わる時期である。これは単に小田妻古窯跡群だけではなく、瀬戸窯全体の変化でもある。瀬戸窯では4型式から5型式に変わるとき、南部系のものがすべてなくなり、北部系のもののみになるという大きな変化を見せる。形態からみれば灰釉陶器の系譜を残したような器形は完全に消滅し、新しく器高の高い山茶碗が出現する。この器形は前代と全く断絶していることから、祖型となったものが別に存在し、それを模倣したものと想定されている。山茶碗には白磁の玉縁を直接模倣したものも存在するので、もともと中国陶磁器を指向した器形であったとする考え方が⁸⁾ある。この時期のものが何を模倣したのかを現時点で具体的に指摘することは難しいが、中国陶磁器を模倣した可能性が高い。また、この時期に施釉陶器であるいわゆる「古瀬戸」の碗・皿などの焼成が始まり、瀬戸窯では大きな画期となった。胎土の変化も中国陶磁を意識したものと考えることができる。この画期は、外的なインパクトを受けて成立したものであった。巨視的に見れば山茶碗生産はこの時期で大きく前期と後期に分けうる可能性がある。

第2の画期は2期の初めで、Ⅰ群の胎土をもつものがⅡ群の胎土をもつものとなるという変化である。形態上に大きな断絶はなく、体部のカーブなどに類似する点もある。今までの見解では、北部系の工人が移動してしまい、その後広く南部系の工人がやってきて拡散するという、大規模な工人の移動⁹⁾が考えられていた。しかし、小田妻古窯跡群の場合、実際には同じ窯を使用したと考えられ、この場合北部系の工人と南部系の工人の関係がどのようなものとなるのか想像しにくい。粘土は基本的には近くで調達していたと思われることから、胎土の差は付近で選択した粘土が違うのか、または粘土

の処理の仕方が違うということになる。このような前提にたった場合、工人グループそのものの違いというよりは、粘土を加工する技術の差もしくは混和材などを用いる技術の違いに求めた方が考えやすい。また、2期の頃から瀬戸窯は徐々に量産体制にはいってくる。窯も幅の大きなものを作るようになる。焼成の際に失敗品を出さないように、砂粒分を多く含む粘土を選択したのか、砂粒分の多い胎土にするために混和材を多く混ぜていると考えるのである。顕微鏡観察では特に鉢の胎土で、明らかに異質な粘土が混じっているという例が観察されている。これも粘土加工の一つの証拠となるであろう。¹⁰⁾ また、遺跡から出土した生の粘土の焼成実験でも混和材の存在を支持するような結果を得ている。¹¹⁾ これらのことを考えると2期の変化は製品の見かけよりも量産を目指した山茶碗の技術革新の結果であったと考えて良いであろう。

第3の画期は5期の始まりの時期で、13世紀後葉のⅢ群の胎土の出現の時期である。Ⅲ群の胎土は砂粒を含むものの比較的緻密である。胎土だけ見れば、むしろ美濃窯に近いものである。これは、美濃の製品の量産による流通の増加と関わりがあるのかも知れない。すなわち、胎土が薄く均質で滑らかな器面を持つ山茶碗の量産により、瀬戸は圧迫を受けたものと思われる。そこで、焼成方法など技術改良により混和材となる砂粒分をあまり含まない胎土で焼成することを可能にしたものと思われる。碗E2は器壁も薄く、使用する粘土も少なく済むようになった。また、重量もかなり減少したので、輸送時の負担の軽減につながったと思われる。以上のことから、第3の画期は、興隆する美濃窯に対抗して新しく砂粒分の少ない胎土による焼成を目指した技術革新によるものと考えたい。

しかし、結局、美濃窯に対抗できるものではなかったため、瀬戸窯における山茶碗生産は衰退せざるを得なかったものと思われる。

(城ヶ谷和広)

註

- 1) 中世陶器の基本的な分類は檜崎彰一氏の分類に従った(檜崎彰一 1977「中世の社会と陶器生産」『世界陶磁全集3 日本中世』)。
- 2) 土田遺跡では13世紀前後をさかいに、猿投、常滑窯主体から瀬戸窯主体に変化している(城ヶ谷和広1991「土田遺跡における中世土器の様相」『土田遺跡Ⅱ』(財)愛知県埋蔵文化財センター)。
- 3) 藤澤良祐 1982「瀬戸古窯址群Ⅰ」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要Ⅰ』など。
- 4) 服部郁 1991『穴田南第6号窯跡』瀬戸市教育委員会や佐野元 1992「水南小前窯の出土遺物—南部系山茶碗第6・7形式と古瀬戸前期の一樣相—」『瀬戸市埋蔵文化財年報平成2年度』瀬戸市教育委員会など。
- 5) 尾野善裕 1992『NN 302号窯・NN 304号窯発掘調査報告書』名古屋市教育委員会
- 6) 註4 服部 1991文献
- 7) 藤澤良祐 1991「瀬戸地方の北部系山茶碗窯」『尾呂』瀬戸市教育委員会
- 8) 柴垣勇夫 1985「山茶碗と白磁碗について」『愛知県陶磁資料館研究紀要』4
- 9) 宮石宗弘・藤澤良祐 1983「穴田南窯址発掘調査報告」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要Ⅱ』
- 10) 顕微鏡観察を行った永草康次によると、同じ個体のなかで、胎土が発泡している部分と発泡していない部分があるという。これは、発泡する温度がそれぞれ違った粘土が混じっていることに起因するという。
- 11) 陶芸家の玉川大学水上和則氏のご協力により、Aa区灰原から出土した粘土の塊で焼成実験を行った。その粘土は比較的均質のものであった。実験の結果、その粘土だけでは成形、乾燥の段階で「切れ」が生じ、成形することができなかった。そこで、その粘土に地山である黄色砂質土を加えると成形・焼成が可能で、当時の製品とよく似た砂粒の多いものができあがった。その粘土の性格は不明であるが、このことは混和材を用いている可能性を想定させる。